

ふぞくの風



大谷フィーバーから考える「過去最高の自分として今日を生きる」

校長 橋元 忠史

巷は大谷フィーバーである。誰がどう考えても活躍と注目度は、スポーツ選手の枠を超えている。ここでお決まりのように、どれだけ凄いかをデータで記すのは避けたい。なぜなら、この原稿が学校だよりとして世に出る頃には、さらにホームラン数や盗塁数は記録更新し続けているのは間違いないからである。1競技の1選手のそれもたった1試合における一挙手一投足が、頻発する災害の中継や日本を取り巻く国際情勢や国内政治の舵取り役を決める選挙報道より先に大きく扱われることをいかなものかと首をかしげながらも、でも一方で、自分からドジャーズの最新情報を動画検索してしまう自分があるのも事実である。

なぜか・・・？それは、大谷選手が心地よい「魅力」に溢れているからである。あのダルビッシュをして「大谷の凄さは記録ではなくどんな物を食し、どんなことを考え、どんな準備をしているかであり、そこを見ないと近づけない」と言わしめるわけだから。大谷は記録を更新し続けても、それ自体の価値を「記録が更新されると言うことはそれだけ、チームの勝利に貢献していると言えるからよいことだ」という分析をしている。あくまでも勝利への貢献というゴールへの手段でしかないということだ。だからこそ、同僚や周囲への心遣いが細やかなのも納得できる。子どもたちを大谷のように・・・いやいや。それは無理？待てよ。そうでもない。一人一人の中に大谷イズムを見出したり、価値付けたりすることはできるのでは。

「前期通して心身共に元気に過ごし、一日も休まず登校できた」『大谷っぼいね～』「できるまで何度も同じ問題を解き続けていたね」『いやあ、それも大谷っぼいね～』「クラスのために〇〇を続けていた」『それ、大谷じゃん』キーワードは、「自分の中の大谷」として振り返らせると素敵だ。

前期の「学びと育ちのステージ」が終了して秋休みに入る。人との比較ではなく、「自分の中の・・・」「この子の中の・・・」という視点で見つめたいものである。

ふと、WBC決勝前の大谷による円陣の声出しを思い出した。名言となった「憧れるのをやめましょう」である。そうか、その時は違う解釈で感動したが、改めて考えると新たな捉えが湧き上がってきた。僕は僕の人生を生きている。君は君の人生を生きている。それぞれが日々を「過去最高の自分」として生きることが大切なのだ。

「学びと育ちのステージ」附属小における712人の子どもたちの「過去最高の自分」を日々更新していく後期のスタートが待ち遠しくなってきた。

【10月の主な行事】

- | | |
|------------------------|----------------|
| ※ 秋季休業（～7日） | 22日（火）運動会予行 |
| 8日（火）後期始業式 | 23日（水）運動会予行予備日 |
| 9日（水）学年・学級PTA（高） | 24日（木）防犯教室 |
| 10日（木）学年・学級PTA（中） | 26日（土）運動会 |
| 11日（金）学年・学級PTA（低） | 27日（日）運動会予備日 |
| 15日（火）冬服更衣準備期間（～11月8日） | 28日（月）運動会振替休日 |
- 運動会係間連携



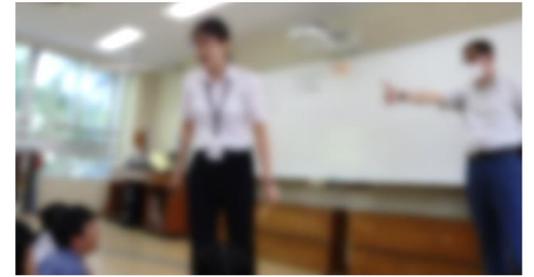
● 夢や目標に向かって挑戦！～第1・2免許教育実習

グランドデザインにも謳っている「教職の魅力発信基地」附属小学校。これからの教育を担う学生に対して、教職の魅力ややりがいを伝えるべく、8月23日から9月20日に今年度の教育実習が行われました。

一か月間の教育実習の中で、教育実習生が子どもたちと真剣に向き合って生活指導を行う姿や授業に向けて熱心に教材研究を行う姿、緊張しながらも準備した教材や教具を用い、張り切って授業を行う姿が見られました。

そして実習の最終日。各学級において、子どもたちの工夫を凝らしたお別れ会が行われていました。多くの実習生や子どもたちが目に涙を浮かべ、共に過ごした日々を振り返りながら、別れを惜しんでいました。

教職の魅力ややりがいをどれだけ伝えることができたか、実習を終えた実習生に、「教師の魅力」について聞きました。



【張り切って授業を行う実習生の姿】



【別れを惜しむ実習生と子どもたちの姿】

子どもに頼られることや成長に大きく関われる喜びがある。

ずっと学び続けることができること。

子どもたちの未来と一緒に創ることができること。

どんなに日々が苦しくて悩んでも、子どもたちの笑顔を見ると全てが報われること。

実習生に聞いた
これぞ教師の魅力

子どもの成長を一番近くでみることができ、それを一番初めに褒めることができること。

子どもの価値観と大人の価値観、それぞれを互いに吸収し合って成長していくこと。

子どもだけではなく、保護者、地域の方とのつながりが増えること。

実習生の言葉から、「教職の魅力発信基地」としての役割を十分に果たすことができたと考えます。そして、教職に携わる者の同志が増えたことをうれしく感じます。実習生の皆さんには、今回の実習を糧に、教師という夢や目標に向かって挑戦してほしいです。

～「ありがとう」にあふれる附属小学校へ～

● 多くの「ありがとう」が寄せられています

今回は、家族に向けた「ありがとう」エピソードを紹介します。

あなたの「ありがとう」エピソードを教えてください
伝えたい「ありがとう」を待っています

いつでも募集中



塾のテストやサッカーの大会に参加できるのは、お母さんやお父さんがお金を出して、させてくれていることを改めて知り、ありがとうという気持ちでいっぱいになった。【6年男児】

自分のがんばりたいことや好きなことに挑戦できるのは、家族や周りの人の支えがあるからですね。それに改めて気づき、素直な気持ちを投稿してくれています。子から親へ、親から子へ、些細なことでも「ありがとう」と伝え合えるって素敵ですね。